

大野の歴史



大

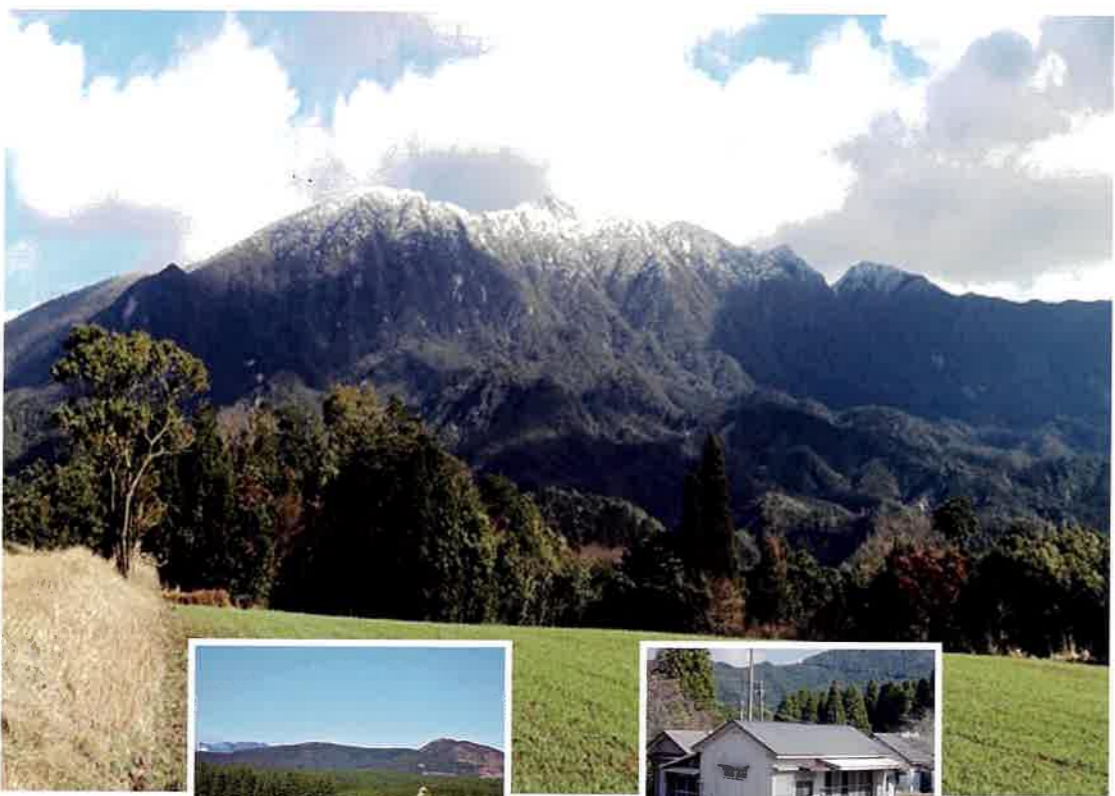
野地区は、大正3年1月12日の桜島大爆発の被害に遭った、当時桜島や垂水に住んでいた人々が移住し開拓していった土地で、垂水市街地から東北東へ約13キロ、高隈山系の中腹標高550mの中山間部に位置しています。夏は冷涼・冬は寒冷な気候で、特に冬場は北西からの強風で気温も低くなり、毎年10cm程度の積雪が見られ、春から梅雨にかけては雨と霧が多い地域となっています。開拓当初は、徒歩以外の交通手段も無く、垂水市中心部から片道3〜4時間を要するまさに陸の孤島であったと伝えられており、開拓事業は苦難の連続で、市販の鋤では歯が立たないほどの原生林を拓くという壮絶なものでした。拓かれた田畑では、まず食料として荒地でもよく育つサツマイモの栽培か

ら始まり、戦後に垂桜、大谷、駒ヶ丘、高峠と大野原周辺にも入植が始

まってからは、炭焼きや林業、茶の栽培などで生計を立てる者が増えていきました。昭和40年代後半から、ジャパンファームが工場を建設し、地区住民も多く就職しました。しかし、住民の約半数が65歳以上という過疎、高齢化が進行し平成18年には大野小中学校が閉校となり、その跡地は大野ESD自然学校として生まれ変わり、現在も住民の活動拠点となっています。

現在は、「つらさげ芋」のブランド化に取り組み、サツマイモの生産面積も増加し、加工品の開発・販売による6次産業化、大野の資源を生かした交流人口の拡大を通じて地域活性化につなげています。

垂桜の歴史



垂

桜集落はその名の通り垂水と桜島の字をとって命名され、昭和21年に地元28戸、黒神16戸、水之上3戸、牛根3戸、その他の地域から6戸の計46戸から始まった集落です。その翌年に新しく6戸が大谷集落に入植し、計52戸となったものの、昭和20〜30年代にかけて30戸以上が離農し、補充入植や開拓の引き継ぎも相まって激しい離合集散がありました。その後、昭和22年に帰農組合、翌23年に法人組合「垂桜開拓農業連合」や38年には牧牛組合ができ、さらに養鶏場までできましたが、現在は養鶏場も撤退しています。昭和48年大隅養豚生産組合の前身である小森養豚場が建設され、現在まで

続いています。当時の主な産業として炭焼きが盛んでしたが、木炭原木

の不足や灯油の進出が大きな打撃となり、そのころ垂水市が推進していたお茶の生産に切り替えることとなりました。8名の農家からなる茶業組合も発足させ、地区の茶工場も建設されるなど産業として定着してきましたが、各々将来を見据えた上で他産業へと移っていきました。

現在ではお茶農家は1軒を残すのみとなりましたが、お茶のほかにも営林署や森林組合での林業にも多くの人が従事していました。また、サツマイモの生産や、休耕地等に地区外の生産者によるインゲンの栽培も盛んに行われています。